

2016年7月13日

請求者 キム・ウビン
論文題目 近世近代初期日朝関係における朝鮮語通訳官「通詞」

論文審査委員 イ ヨンスク
糟谷 啓介
三ツ井 崇

1. 本論文の内容と構成

幕藩体制下において日朝関係を担当していたのは対馬藩である。その目的は、朝鮮通信使の迎接、釜山の草梁倭館での貿易や朝鮮漂流民送還などであった。この際に対馬と朝鮮の間で通訳などの実務を担っていたのが「通詞」であり、その養成には対馬藩があたっていた。しかし、明治期に入ると、日本と朝鮮の間的外交関係は政府の外務省が担当することになり、通訳の養成も外務省が中心になって進められた。本論文は、近世から近代にかけての日本における朝鮮語通訳の役割が、日朝関係の変化にともなってどのような変遷を遂げたかを追究することを目的とする。論文の構成は以下の通りである。

第1章 問題の所在と研究の課題

- 1.1 本研究の背景について
- 1.2 先行研究
- 1.3 本論文の研究課題
- 1.4 研究調査方法
- 1.5 各章の概観

第2章 18・19世紀における日朝交流における通訳

- 2.1 朝鮮王朝における日朝交流のための通訳
- 2.2 釜山草梁倭館における対馬出身の留学生について：「稽古医師」
- 2.3 対馬府中（厳原）における朝鮮語「稽古所」の設立
- 2.4 朝鮮語「稽古所」における教育制度
- 2.5 小まとめ

第3章 18・19世紀対馬藩における朝鮮語通訳について

- 3.1 朝鮮語通詞の職階
- 3.2 朝鮮語通詞の職務
- 3.3 朝鮮語通詞の昇進および社会的地位について
- 3.4 小まとめ

第4章 明治期における朝鮮語教育の転換

- 4.1 明治初期外国語教育機関について
- 4.2 外務省による朝鮮語教育
- 4.3 東京における朝鮮語学習
- 4.4 小まとめ

第5章 19世紀朝鮮における日本人の朝鮮語学習者について

- 5.1 外務省による留学生派遣
- 5.2 商業を目的とする学習者
- 5.3 浄土真宗僧侶による朝鮮語学習
- 5.4 小まとめ

第6章 転換期を生きる朝鮮語通訳 浦瀬裕

- 6.1 幕末期における対馬藩大通詞としての活動
- 6.2 明治期における浦瀬裕
- 6.3 小まとめ

総まとめ

史料

参考文献

付録

2. 本論文の概要

第1章では、朝鮮語通詞に関するこれまでの先行研究がサーヴェイされ、本論文の取り組む課題が提示される。また、近世日本における朝鮮語教育の諸相が概観される。近世においては、薩摩藩、長州藩、長崎、対馬藩において朝鮮語を話す人材が養成されていたが、その目的や方法はそれぞれが置かれた事情を反映して様々に異なっていた。たとえば、長州藩においては、頻繁に朝鮮からの漂流民が漂着したため、その送還のために朝鮮語のできる人材を必要としていた。このなかでもっとも体系的に朝鮮語教育を行っていたのが対馬藩である。

第2章では、18世紀から19世紀にかけての日朝交流における通訳養成について論じられる。朝鮮では中央政府に所属する「司訳院」において日本語の通訳官が養成されたのに対して、日本で日朝関係を担当していたのは幕府ではなく対馬藩であったため、通訳の養成も対馬藩の手に任されていた。当初は公的な教育機関は置かれなかったが、18世紀初めに儒学者雨森芳洲によって朝鮮語教育のための「稽古所」が設置されてからは、体系的なカリキュラムによって朝鮮語通詞の養成が行われた。これらの点に関して、著者は宗家文書などの歴史資料を駆使して、対馬における通訳養成の実態を描き出している。

第3章では、対馬藩の朝鮮語通詞が担当した任務のことが論じられる。朝鮮との交易に依存していた対馬藩にとって、朝鮮との友好的な関係を保つことが重要な課題であったため、朝鮮語通詞の任務にも幅広いものがあった。冒頭でも述べたように、おもにそれは朝鮮通信使の通訳、朝鮮からの漂流民の送還事業、釜山に置かれた草梁倭館における仕事の三つに分けられる。この章の後半では、対馬藩における通訳をめぐる人材確保のやり方について、史資料を提示して具体的

な議論が行われている。たとえば、通訳を供給する母体となった商人集団「六十人」の格は藩から榮譽として与えられるものであったことを、大通詞小田常四郎の事例を跡づけることで明らかにしている。

第4章では、明治期に入ってから日本における朝鮮語教育の変化が論じられる。廃藩置県によって日本の対朝関係を担当する部署は対馬藩から中央政府に移った。それにともない朝鮮語教育にも変化が生じた。1872年に対馬の厳原に「韓語学所」が開設されるが、その設立の意図は、雨森芳洲により開校された教育機関とは異なっていた。しかしこの韓語学所も翌年には閉鎖され、学校はかつて日朝外交の拠点である倭館のあった釜山・草梁に移され、文部省の所管の「草梁館語学所」となるが、わずか数ヶ月でこちらも閉鎖される。最終的に1880年に東京外国語学校に朝鮮語科が設置されることで、近代の朝鮮語通訳官の養成機関は完成する。著者はこの転変のプロセスやそれぞれの教育機関におけるカリキュラムなどをつぶさに検証し、大きくいえば、対馬藩における実用的な通訳から、高度な教育を受け国の政策に奉仕する通訳官への転換があったと見ている。

第5章では、明治期に入ってから日本で朝鮮語を学んだ人びとの学習目的について論じられる。大きく分ければ、そこには外務省勤務の通訳官、商売のため、宗教的布教のためという三つの目的が見分けられる。日朝修好条規締結後は、日本人は朝鮮で自由に居住することが認められたため、多様な人びとが朝鮮に渡った。著者は付録で1880年から1881年までの2年間に渡る旅券発行の記録を整理して一覧表を作成しており、それを見ても渡航者の年齢、職業、目的がさまざまであることがわかる。布教に関しては、本願寺大谷派は維新政府から布教の依頼を受けており、日本人僧侶の派遣や朝鮮からの留学生の受け入れに熱心であった。これらの実態を著者は史資料をふまえて丁寧に論じている。

第6章では、幕末から維新时期にかけて活躍した対馬出身の通訳浦瀬裕について検討する。幕末期に浦瀬は、通詞のなかで最高の地位にあたる大通詞であったが、その仕事は対馬藩と朝鮮側の通訳官とのあいだの連絡係にすぎなかった。しかし、明治期になると、浦瀬の朝鮮語能力は明治政府の認めるところとなり、釜山の倭館が外務省に接收された後も浦瀬はそのまま朝鮮に滞在しつづけた。そして、単なる通訳官としての職務を超えて、日朝間の外交交渉にも関与するまでになる。さらに浦瀬は外務省の朝鮮語教育機関や本願寺大谷派の別院で朝鮮語を教える教育者としても活躍した。著者はこうした浦瀬の活動を多くの史料に基づいて丁寧にたどることで、近世から近代への朝鮮語通訳の役割の変化を跡づけている。

総まとめでは、近世の対馬藩における通詞から近代の外務省における通訳官に至る過程がまとめられ、連続面と断絶面という二つの側面からその過程を描いている。そして、近世から近代にいたる朝鮮語通訳の歴史を、朝鮮語教育の変遷という角度からもう一度検討し直したうえで、論文全体のまとめとしている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、近世の対馬藩の通詞から近代の朝鮮語通訳官への展開は、従来の先行研究では、おも

に断絶としてとらえられてきた。とくに中央集権化により外交事務が外務省に一元化されて以降の朝鮮語教育はそれまでのものとの断絶が強調され、対馬との関わりについては十分に検討されてこなかったが、著者は、そうした断絶はありながらも、近世から近代にかけての連続性があることにも注目した。たとえば、明治初期に通訳養成のために用いられた朝鮮語学習書のなかには、雨森芳洲の編んだ『交隣須知』『隣語大方』があり、近世の対馬藩における朝鮮語教育との繋がりがかいまみられる。また、本論文でふれられているように、1905年の第二次日韓協約の際に通訳を務めた前間恭作は、対馬藩出身であり厳原の中学校で朝鮮語学習を始めた。そして、慶應義塾大学を卒業後、1891年の外務省による官費留学生として朝鮮に派遣された。こうしたところにも、近世対馬藩における朝鮮語教育とのつながりが見えてくる。さらに、そのことを顕著に示すのは、第6章で取り上げられた浦瀬裕の事例である。これらの観察をもとに、著者は断絶と連続の両面を視野に入れて朝鮮語通訳の歴史をたどり直した。このことはたいへん大きな意義のある成果である。

第二に、これまで通訳の役割については、おもに田代和生が朝鮮通信使や貿易などの近世日朝外交・交易に果たした役割について研究してきたが、通訳は狭い意味での通訳業務を超え、幅広い仕事に携わっていた。著者はこれまでの研究であまり言及されなかった近世の朝鮮人漂流民への対応という側面に注目する。資料で確認できるだけでも、1628年（寛永5）から1888年（明治21）までの間に日本に漂着した漂流民の件数は915件、人数は9553名であった。頻繁に行われた漂流民の送還は、対馬と朝鮮の間の交流関係に深く関わっていた。朝鮮通詞はこれらの漂流民の取り調べから送還に至るまでの事務手続きを担っていた。また、近代に入ってからでも、日本と朝鮮との間に書契（外交文書）問題が起こった際に、通訳浦瀬裕は、朝鮮側との交渉の当事者として交渉内容に関わる重要な役割を果たした。これまで前間恭作や国分象太郎について言及された研究は存在したが、さらに浦瀬という人物について触れたことで、事例研究に広がりを持たせたという点が意義深い。実際、浦瀬は近世の語学書『交隣須知』を明治期に校訂した人物でもある。この点を踏まえると、本論では明示されていないが、今後、第一で触れた近世と近代の連続と断絶という観点にもつながりうる重要な事例研究であることがわかる。

しかし本論文には、以下のような問題点が存在する。

第一に、章によっては、先行研究に対する本論文の位置付けが不明確な部分や先行研究の整理が不十分な部分が見受けられる。そのため論述が不必要なまでに冗長に思われる箇所や、記述に注意深さが不足するように感じられる箇所に出会うことがあるのは残念である。とくに田代和生による日朝外交史研究と通詞に関する研究成果や、『交隣須知』を始めとした語学書研究の成果、近代初期における日本の朝鮮語教育史に関する先行研究などを踏まえたうえで、先行研究に対する本論文の独自性がどこにあるのかをもう少しはっきりと打ち出して議論を進めていけば、論述の説得性がさらに増したであろう。

第二に、資料の扱い方に関する問題がある。著者が史資料を丁寧に調べ、それに基づいて議論を進めていることは理解するが、ときには史資料の羅列で終わっている箇所も見られる。著者自身の視点からの論述の柱をしっかりと立てたうえで、史資料に基づく事実の観察や発見を論述のなかに溶け込ませる努力がもう少しあってもよかったのではないかと思われる。また、資料や参

考文献を引用あるいは言及する際に不適切なやり方がいくつか見られる。引用や言及に際しては、より正確なやり方を取ることが望まれる。

しかし、以上の弱点は著者も十分に理解しており、本論文の達成した成果を損なうものではない。本論文は、近世における通詞の要請、役割について総合的にとらえようとし、また近代への連続的視野の可能性を具体的に示した意欲作であり、優れた学術的価値を有している。この論文で示された成果を著者がさらに発展させることが強く期待される。そのための手腕と力量を著者が十分に備えていることは、本論文が証明している。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

2016年7月13日

論文審査委員

イ ヨンスク

糟谷 啓介

三ツ井 崇

2016年6月22日、学位請求論文提出者 キム・ウビン 氏の論文「近世近代初期日朝関係における朝鮮語通訳官「通詞」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、キム・ウビン 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、キム・ウビン 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。